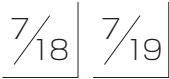


楽曲紹介

解説=永井玉藻



ラヴェル(1875-1937)
道化師の朝の歌

7月定期のプログラムに登場する1人めの作曲家、モーリス・ラヴェル(1875-1937)の管弦楽作品には、自作のピアノ曲からの編曲がしばしば見られる。『道化師の朝の歌』も、原曲は、1904年から1905年にかけて作曲された5曲からなるピアノのための組曲『鏡』の第4曲。組曲中、唯一スペイン語の作品タイトル「アルボラーダ・デル・グラシオーソ Alborada del Gracioso」を与えられたこの曲には、ラヴェルが自らのアイデンティティとして強く意識していた、バスク地方への想いがうかがえる。

作品はA-B-Aの3部分にコーダが付く構成。原曲のピアノ版に顕著なスタッカート、同音連打、グリッサンドなどは、オーケストラの様々な楽器に割り振られ、さらに弦楽器のピッツィカート、管楽器のフラッター奏法、ハープや打楽器の音色などによって彩りを増している。中間部はファゴットの旋律で始まり、24分割された弦楽器がスペイン風のリズムを刻む。コーダでは、冒頭に短調で提示された主題が長調で再登場し、オーケストラの全パートが終結へとなだれ込む。



【作曲年代】 1905年 【初演】 1919年5月17日パリにて
 【楽器編成】 フルート 3 (3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、タンブリン、シンバル、トライアングル、クロタル、カスタネット、シロフォン)、ハープ2、弦楽5部

ラヴェル(1875-1937)

ピアノ協奏曲 ト長調

1928年、ラヴェルはアメリカでの4ヶ月に亘る演奏ツアーを行い、世界的な名声を獲得した。この成功をふまえ、彼は自身がソリストとして演奏することを念頭に、ピアノ協奏曲の作曲に着手する。ラヴェルが残した「協奏曲」と名の付く作品は、このピアノ協奏曲と、同時期に委嘱を受け作曲した「左手のための協奏曲」のみ。ただし、大規模な3管編成で1楽章形式の「左手」に対し、ト長調のピアノ協奏曲はコンパクトな2管編成で、急-緩-急の3楽章構成、という古典的な趣である。

第1楽章(アレグラメンテ) むちの一撃で開始される、ソナタ形式の楽章。第1主題はピッコロで、第2主題はピアノで提示される。作曲家がアメリカで出会ったブルーノートやジャズを思わせる旋律、シンコペーションの躍動的なリズムが、軽快かつ繊細な曲想に織り交ぜられている。

第2楽章(アダージョ・アッサイ) ピアノと木管楽器群のソロが際立つ叙情的な楽章。3拍子のリズムの上でゆったりと歌われるピアノの旋律はフルートに受け継がれ、再びピアノへと帰り、最後は弦楽器に支えられたイングリッシュ・ホルンとピアノの対話へと至る。

第3楽章(プレスト) ドラムロールとファンファーレで口火が切られ、疾走する楽章。シンコペーションリズムのピアノ、金管楽器の行進曲的な主題、ファゴットとピアノと弦楽器の掛け合いなど、息をつかせぬ展開が連続する。

【作曲年代】 1929～1931年 【初演】 1932年1月14日パリにて

【楽器編成】 ピッコロ、フルート、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、エス〔Eb〕・クラリネット、クラリネット、ファゴット2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、タンブリン、シンバル、タムタム、トライアングル、ウッドブロック、むち)、ハープ、弦楽5部、独奏ピアノ

ドビュッシー(1862-1918)

牧神の午後への前奏曲

2018年は、クロード・ドビュッシー(1862-1918)が55歳でこの世を去ってから100年、という節目の年に当たる。彼が気鋭の若手作曲家として、大きな評価を得た初期の作品が、『牧神の午後への前奏曲』である。

ドビュッシーは、フランス象徴派の詩人、ステファヌ・マラルメ(1842-1898)が毎週火曜の夜に自宅で主宰する「火曜会」に、音楽家としては唯一、出入りしていた。そのため、1890年に詩人の『半獣神の午後』の舞台化の話が持ち上がったとき、マラルメはドビュッシーが音楽を担当することを希望したとされている。この劇の上演は最終的には実現しなかったが、作曲家は、構想していた音楽のうち「前奏曲」の部分だけ仕上げており、これがひとつの完結した作品となった。とはいえ、ドビュッシーはこの作品でマラルメの詩の内容を忠実に音楽化しようとしたのではなく、初演の曲目解説でも、「この前奏曲の音楽は、ステファヌ・マラルメの美しい詩を非常に自由に図解したものである」と説明している。

作品は終結まで途切れない1楽章構成。冒頭でフルートが奏する半音階の主題は何度も回帰するが、そのたびに伴奏の和声が変化し、多面的な表情付けがされている。「Très modéré 中庸な速さで」と指定されたテンポは、緩い拍節感とともに終結へ向けてさらにゆったりとし、アンティーク・シンバルがほのかに響く幕切れとなる。

7/18

7/19

【作曲年代】 1892～1894年 【初演】 1894年12月22日パリにて

【楽器編成】 フルード3、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、打楽器(アンティーク・シンバル)、ハープ2、弦楽5部

ドビュッシー (1862-1918)

交響詩『海』(管弦楽のための3つの交響的素描)

日本とフランスの外交関係は、ちょうど160年前の1858年10月9日に、日仏修好通商条約を締結したことに始まった。フランスにとって、「日出ずる国」の文化は驚きに満ちており、特に葛飾北斎や歌麿などの浮世絵は、多くの芸術家を魅了した。ドビュッシーもその一人で、『海』の初版楽譜では、作曲家の希望により北斎の浮世絵集『富嶽三十六景』の「神奈川沖浪裏」を模した大波の絵が表紙を飾っている。

その『海』の作曲は、1903年8月から1905年3月にかけて行われたが、作品を取り巻く環境はまさに大波に揉まれる荒れ模様だった。作曲中のドビュッシーの私生活は、不倫と駆け落ちと妻の拳銃自殺未遂、というスキャンダルまみれ。1902年に初演された『ペレアスとメリザンド』に続く大作だったにも関わらず、初演に対する評価も芳しくなく、1908年に作曲家自身の指揮で演奏されるまで、この作品の真価は世に認められなかった。

しかしこの経緯は、ドビュッシーを『海』の改訂作業へと導いた。最も大きな変更となったのが、第3楽章終盤の、ホルンとトランペットによるファンファーレである。1910年に再版されたデュラン社出版の楽譜では、このファンファーレは削除されているが、改訂の過程は複雑で、削除の指示をドビュッシーの誤解と判断し、当該箇所を演奏してきた指揮者も多い。今回の指揮者、ヴィオッティがどのような結論に至ったかは、ぜひ演奏で確かめていただきたい。

第1楽章「海の夜明けから真昼まで」 序奏+2つに分かれる主部+短い終結部による楽章。冒頭にチェロが弱音で奏する音程とリズム、直後にヴィオラが奏する5音音階ののちに、イングリッシュ・ホルンとトランペットの主題が聞かれる。フルートとクラリネットが奏する主題による主部の前半、ホルンと4分割されたチェロが導く主部の後半を経て、楽章冒頭に登場した素材が繰り返され、華々しく終わる。

第2楽章「波の戯れ」 短い序奏とA-B-Aの構成による主部に、終結部が付く楽章。全体を通して、グロッケンシュピールとハープ、弦楽器のトリルやトレ

モロの繊細な動きが中心となり、狭い音域で上下行する管楽器の旋律を支えている。

第3楽章「風と海との対話」 唸るような低弦楽器の響きで始まる。第1楽章で聞かれたイングリッシュ・ホルンとトランペットの主題など、これまでに登場した様々な主題や、その主題から引き出された素材がこの楽章で循環し、次々に曲想を変化させ、フィナーレへ突入する。

【作曲年代】 1903～1905年 【初演】 1905年10月15日パリにて

【楽器編成】 ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール)、ハープ2、弦楽5部

7/18

7/19

ながいたまも／パリ第4大学博士課程修了、博士(音楽学)。東京フィルハーモニー交響楽団ライブラリアンとして日々の業務にあたりつつ、武蔵野音楽大学、慶應義塾大学にて非常勤講師を務めている。2018年3月に、論文「19世紀後半のパリ・オペラ座におけるバレエ伴奏者」が、日本音楽学会の機関誌『音楽学』に掲載された。